

幼童教育と童謡 (3)

葛原 齒

C、幼兒の心の整頓に役立つ童謡

童謡に、幼兒の心を混亂さすものがありはしないかを心配して、前講をなしましたが、しかし、あれも、緊張して、

第一節は何、第二節は何と、明確に覚えさす事が出来れば、苦はなくて、却つて、心を引き締めて、教育的だとも謂へませう。大理人か、大泥棒か、紙一重の差が原因となつて、方向を次第に變へた兩極端は、全然、相反するものになつてしまふのです、國と國との間も然り、人々との間も然り。全く、これは何だか、天地間の、人間界の、一つの約束事ではありませんかしら。

前々講の中の「覚え苦い童謡」も、前講の「幼兒の心を混亂さす憂のある童謡」も、これの導き方によつては、さうでなく、禍を轉じ福をなす事は出来ませんか。毒薬も時を方

に、童謡には、歌詞の他に、曲といふものが伴つてゐて、これを活殺自由にしようとしてゐます。それだけ一概に論定する事は出来ません。

○

そこで、次の『鈴の音』にしましても、

第一番は、母さまですよ、鐵についてゐる鈴ですよ

第二番は、小猫の鈴ですよ、猫の首輪についてゐる鈴

ですよ、その鈴が、いつ、チンチロロくく鳴るん
でしたかね」

と問答して、

「私の振袖に、ぢやれつく度に、なるんです」。

正確かめておくべきです。しかし、現代の幼稚園や小學校の幼兒は、多く、洋服で、振袖は着ないのですから、「振袖」を改作しようと思つて、長い袂を斷つて、元祿袖にす

る様に、チキンを切つて何か、別の袖にする裁縫の道ほ
ぎ、歌詞には外科のメスが振へないので困つてゐます。「元
祿袖」や「筒袖」には、猫がぢやれついで呉れませんので！。

鈴の音

梁田貞氏曲

一、チンチロロ、チンチロロ、

チロ／＼、チロロ、チンチロロ、

赤いおべへを母さまが

おぬひになる時、チンチロロ、

鐵の鈴が、チンチロロ、

あれ面白い、チンチロロ、

二、チンチロロ、チンチロロ、

チロ／＼チロロ、チンチロロ、

小猫が私の振袖に

ぢやれつく度に、チンチロロ、

首輪の鈴が、チンチロロ、

あれ面白い、チンチロロ、

○ (「大正幼年唱歌」第十集)

次のは「子兔踊」さもし、ビョン／＼の類の擬態語を少し
かへて、小松氏の曲のついたのが『昭和幼年唱歌』にもあり
ますが、

母親兔の出て来るまで、

子兔ばかりで踊つてゐるご、

影さしよに

耳も はねる

こいふのは、全く同じです。

これは、全然、混亂のしようのないものです。そして、

幼児は、此の擬態語の面白さに引きつけられて、喜んで、

ビョン／＼／＼／＼／＼のちには、はね出します。

ビョンビョコリン

宮城道雄氏曲

ビョン ビョン ビョンビョコリン

ビョン ビョン ビョンビョコリン

母さん兔の出て来るまでは

子兔ばかりで一けいこ

ビョン ビョン ビョン ビョン

ビョン ビョン ビョン ビョン

酔つたのかと思はれるのです。又、

お尻であるから

尻餅かと思はれ

怪我した事かと思はれるのです。

お猿のお顔

宮城道雄氏曲

お猿のお顔は 赤いのさ

生れた時から 赤いのさ

怒つてゐるんぢやないんだよ

酔つぱらつてゐるんでも ないんだよ

お猿のお尻は赤いのさ

生れた時から 赤いのさ

尻餅ついたんぢやないんだよ

怪我してゐるんでもないんだよ

(「箏曲童謡」第七集)

しかし、これは、下品に聞えますので、私は、之を葬り

たく思つてゐます。しかも、可愛らしいお嬢さんが、上品

に美しいキモノで、お琴の前に、お行儀よく坐つて、

ピョコリン ピョコリン

ピョコ ピョコリン

ピョン ピョン ピョンピョコリン

ピョン ピョン ピョンピョコリン

踊る皆の小さな影さ

一しよにはねてる長い耳

ピョン ピョン ピョン

ピョン ピョン ピョン

ピョコリン ピョコリン

ピョコ ピョコリン

(「箏曲童謡」第五集)

○

次のは、

第一節が、お顔、であり

第二節が、お尻、であります。又、

お顔であるから、

酔つたのかと思はれ

——お尻は 赤いのさ

尻餅ついたんぢやないんだよ

こ上手に、歌はれ、ば歌はれるだけ、近頃、私は、穴にも
はいりたいさいふ氣持です。

○

すく〜こ伸びるものは、竹の子であり、又、コドモで
あります、幼児であります。竹の子の方は、只、その體だ
けの事ですが、幼児の方は、それこそ、手足も心も、すく
すくこ伸びます。遊んでる間に、寢てる間に、晝も、夜も、
只、すく〜こ——、

竹の子に「伸びろ」さいふ心は、我が子に、「伸びろ」さい
ふ親心です。そして、「晝の風」が、父親の心ならば、「晝の
露」は、母親の心です。そして、又、父は父らしく、正しく
強く、

「お日様見上げて——」

さいひ、母は母らしく、優しく美しく、

「お星様見上げて——」

さいふ。この對照の正しさ、確かさは、動きません。そこ
で、

「一番は、晝ひるでしたかね、晝ひるですから、何を見上げて、伸
びるんびるんでしたかね」

「お日様、見上げて、です」

「よろしい。お日様でしたね。それから、一番は——」

「お星様見上げて、です」

「よろしい。お星様でしたね。そして、あのお星様は、
晝ひるでしたかね、夜ひるでしたかね」

こ、若し問ひでもしよものなら、幼児達は、

「先生は、何をいつていらつしやるの」

こ怪しんで、異口同音に、

「お星様は、夜ひるですよ」

「先生、知らないんですか」

こさへまじめに笑つてくれるでせう。

「左様さよう々々。お星様は、夜ひるでしたね。

晝ひるは、お日様見上げて——

夜ひるは、お星様見上げて——

でしたね。

それから、おしまひの所は、ごちらが

籬の風さらら

で、そして、ごちらが、

笹の露 はらら

でしたかね」

と確めておかなくてはなりません、中にはこの擬態を取違

つて

籬の風 はらら

笹の露 さらら

といふものも出て来さうです。そこで、「さらら」「はらら」

「さらら」「はらら」の意味の相違の説明も、必要になりませう。

「皆さんも、竹の子に負けない様に、強く大きくなりませうね。」

「ニコニコさせて、不行儀を思はず、立上つて、両手を、

「さ、さ、お日様に届くまで」

と、うんちん伸ばさすのも、これに附随して、よい指導であ

りませう。

竹の子

一、伸びろ 竹の子

晝間も伸びろ

晝は お日様 見上げて

伸びろ 籬の風さらら

二、伸びろ 竹の子

夜の間も 伸びろ

夜は お星様 見上げて

伸びろ 笹の露はらら

(「筆曲童謡」第四集)

○

この幼稚園にも有るのは、又、有りたいたいの、セルロイドのキューピーさんです。何しろ、肥えたるかなキューピーのすべてませう。わけて、まるく、肥えた手足を頼つて。

その眼のつぶらに、愛くるしいこころ。わけて、両手の指を、パツパツ開いた氣持よさ。そこで

一番は、お目々で

二番は、指でしたね

さだけ、後は、何の不安もなく、すぐに、「キューピーさん〜」です。

キューピーさん

弘田龍太郎氏曲

キューピーさん キューピーさん

何に そんなに 驚いて

大きなお目々を みんなばつこあけて、

白黒させて立つてるの

キューピーさん キューピーさん

何に そんなに 驚いて

五本の指を みんなばつこあけて

裸のまんまで立つてるの

〔幼年童話集〕第一輯

○
日があたる

小松耕輔氏曲

日があたる 日があたる

上の窓あけるミ 上の方にあたる

下の窓あけるミ 下の方にあたる

日があたる 日があたる

日があたる 日があたる

大きい窓あけるミ 大きい日があたる

小さい窓あけるミ 小さい日があたる

日があたる 日があたる

〔けんく子雉〕より

自然界の現象の力、天體の不思議は、幼時から感じさせたいものです。さうして、太陽そのもの、不思議さいふよりは、偉大さは 直接に理解出来なくても、その光線の現はす種々の不思議は、ほんみに、大した手品です 魔術です。太陽が昇つて、日があたるさいふのは、あたりまへの事で、何の不思議でもない様ですけれども、しかし、その光年かうねんを考へる事は出来なくても、その光度、また、その温度を、感じさせる事は出来なくても、真正直に、上の窓あけるミ 上に、下の窓あけるミ下に、又、大きき窓をあ

けるこ、大きい日がさし、小さい意をあげるこ、小さい日がさすやうに まごこに、人間のするまゝに、現はれる太陽の光りの、素直さ、いえ、正しさ、それは、成人して後も、十分に味ははせたい大した事實です。その事實を信じ、それが、もし、正しい心でなかつたら、何さしませう。百の修身例話よりも、かうした事實を信じさせ、その嚴肅味さへ、おぼろにでも感じさせ得たらさ思ふのです。

さて、此の童謡は、一度きいたゞけで、

上の意あけるこ

大きい日があたる

こいふものも無いでせうし

大きい意あけるこ

上の方にあたる

こいふものも無いでせう、もし、有れば、それこそ、他の事を考へながら、唯、口先で皆について、歌つてゐるので、すから、その児童の放逸さへ、分るのでした。

○

滑稽味の少ないのが、殊に、従來のお琴や三味線の童謡

でした。一般の童謡にも、アハハ……オホ……こ笑はされるものが多いこは思はれません。此の時、私宮城氏の多年の共鳴は、さうぞ、唯、美しき、唯、上品に、このみ傾いてゐた箏曲界に、殊に、そのコードモ曲に、心から、ニッコリさせられ、解放された哄笑をさへ伴ふものを、狙つて、幾篇もの新作をものし得ました。大正七年の處女作「おさる」を初めこして、「チヨコレイト」「ワン／＼ニヤオ／＼」「町の物賣」また、次の「小僧さん」など、みな、所謂三曲演奏會で、又、家庭向のレコードとして、まごこに、よい役目を果してゐます。しかし、さうぞ、くすぐりや、じやす氣分に陥らない様にこは、作曲者と共に、常に心してゐるのです。そこで「小僧さん」も

第一番が炭屋の小僧さん

第二番が、米屋の小僧さん

である事を、豫め、しつかり記憶に喚起させておいて、演奏にかゝれば、何の苦もないのですが、それでも、うつかりするこ、

炭屋の小僧さんが、

「ついで、今日は

米屋でござい」

さいつて、米屋の小僧さんのが、

「大きな俵は炭俵」

になつたりしては、それこそ、くすぐりの大失敗になるこ

こは、いふまでもありません。

鼻黒鼻白小僧さん

宮城道雄氏曲

小僧さん

炭屋の鼻黒小僧さん

大きな俵は炭俵

ガツサリ ガツサリ ガツサリ

「へい今日は

炭屋でござい」

大人見たいな ねぢ鉢巻の半黒手拭汗ふけば頬つぺも半

黒目蓋黒

小僧さん

米屋の鼻白小僧さん大きな俵は米袋

ウントコ ウンく

ウントコサ

「へい、今日は

米屋でござい」

大人見たいな ねぢ鉢巻の半白手拭汗ふけば頬つぺも半

白目蓋白

（「箏曲童話」第九集）

○

以下數篇、各節を對照させて、よく似せて、しかも覺え易く作つた積であります。そして、各々、その動物の特異性を狙つて、動物の先生方からも、お小言を頂かない様にした積であります。唯、七面鳥と鸚鵡の怒つてゐるのか、ゐないのか、それは、分らなくて、唯、形に現はれた點だけを、さう解釋したに止まります。さ白狀しますさ、やはり、お小言でせうかしら。

ペリカン

小松耕輔氏曲

一、大きな嘴 自慢でござる

重さうに見えても 軽々さ

振り廻される嘴でござる

ペリカン 自慢の嘴でござる

うすもゝ色の嘴でござる

二、大きな袋が自慢でござる

無ささうに見えても かくれてゝ

直ぐにふくらむ袋で ござる

ペリカン 自慢の袋で ござる

きいろいゝ袋で ござる

(「昭和少年唱歌」第二集)

七面鳥

梁田貞氏曲

一、キヨロツくくく

キヨロツくくく クツくく

赤い顔して 怒りまはる

七面鳥は をかしいな

翅をひろげて 怒りながら

キヨロツくくく

キヨロツくくく クツ、クツ、ク

二、キヨロツくくく

キヨロツくくく クツ、クツ、ク

青い顔して 逃げ出した

七面鳥は をかしいな

翅を すほめて にげていく

キヨロツくくく

キヨロツくくく、クツ、クツク

(「大正幼年唱歌」第六集)

梁田貞氏曲

一、あうむが きげん のよい時は

人のまねして 口を利く

「お早う」、「お休み」、「いらつしやい」

「坊ちやま」嬢ちやま「左様なら」

まだ 此の他に、出たらめの

わけの分らぬ事もいふ

二、あうむが 怒つてゐる時は

時々 へんな聲出して

先の曲つたくちはしで

自分のお家の金網を

一生懸命かぢります

何を そんなに怒るのか

(「大正幼年唱歌」第四集)

ペンギン

梁田貞氏曲

一、よた〜 あんよが 短かいな

ペンギン あんよが 短かいな

あんよが お上手 ここまでお出で

二、ばた〜 つばさも短かいな

ペンギン あんよ も 短かいな

あんよがお上手 ここまでお出で

三、まあ〜 立派な燕尾服

ペンギン みんなで ぎ〜行くの

あんよがお上手 ここまでお出で

(「昭和幼年唱歌」第一集)

首ふり鼻ふり

宮城道雄氏曲

熊が首振る

鐵の格子の中で首振る

氣取つて振る振る

ブラ〜〜〜〜

あまり振るなよ ちぎれるぞ

お首がちぎれて すつこぶぞ

象が鼻振る

固いたゝきの上で鼻振る

氣取つて振る振る

ブラ〜〜〜〜

あまり振るなよ ちぎれるぞ

お鼻の孔がなくなるぞ

(「箏曲童謡」第三集)

小松耕輔氏曲

牛三馬

一、うの字のつくもの 牛三馬

牛は のそ〜 のつそのそ

馬は バカ〜 バッカバカ

牛はもう〜 馬ひん〜

二、うの字のつくもの 牛と馬

牛のしつぽは すゝるする

馬のしつぽは ばつさばさ

牛は もうく 馬ひんく

三、うの字のつくもの 牛と馬

牛は二本の角じまん

馬はたてがみ大じまん

牛は もうく 馬ひんく

〔昭和少年唱歌〕第二集

白 兎

弘田龍太郎氏曲
宮城道雄氏曲

白 兎

あなたのお家は ぬくさうね

草のおふさん ふくらんで

お日が ボカく ぬくさうね

白 兎

日向ぼっこは ぬくさうね

白毛のおへべに くるまつて

何だか さつきから ねむさうね

〔ニコくペンくの歌〕より

犬と猫

小松耕輔氏曲

一、私は お家の犬ですよ

私がるないご悪者が

お家へはいつてまゐります

私は お家の忠義もの

ワン ワン 私は いつまでも

可愛がつて下さいな

二、私はお家の猫ですよ

私がるないご夜の闇に

鼠が出ます さわぎます

私はお家の忠義もの

ニャアく 何でも私を

可愛がつて下さいな

〔大正幼年唱歌〕第四集

せみ

梁田貞氏曲

一、お倉の向で ないてゐる

ミン〜 蟬がなくてゐる

大きな聲で ミーン ミン

小さな體で あんなこゑ

ミン〜 蟬がなくてゐる

ミン〜 蟬がなくてゐる

二、お庭の中でも ないてゐる

カナ〜 蟬がなくてゐる

大きな聲で カアナカナ

小さな體で あんなこゑ

カナ〜 蟬がなくてゐる

カナ〜 蟬がなくてゐる

(「大正幼年唱歌」第二集)

ミン〜 蟬がなくてゐる

梁田貞氏曲

一、ミン〜 蟬がなくてゐる

向の森でなくてゐる

大きな聲で よい聲で

一生懸命ミーンミン

二、ミン〜 蟬が ないてゐる

夕日をあびた森の木で

涼しい聲で よい聲で

夏だ〜 ミーンミン

(「昭和幼年唱歌」第三集)

以上、凡て、第一節が何であつて、第二節が何であるか
いふ事を、よく、豫め思ひ出させておくのです。そして、
伴奏樂器で、一回弾いて、メロデーを聞かせて後、

「さア、一番、△△ですよ」

の要領で、はじめますよ、絶対に間違はないで、すら〜
ミ歌ひ進められる筈です。